

## 機

戦に於て將たるもの心得べきことは、敵を知り己を知ることであるが、も一つ大切なことは機を見てこれに乗ずるといふことである。否それよりも更に重要なことはその摑むべき機をつくり出すことであらう。それは何等かの方法によつて一つの情勢を釀し出し、その雰圍氣の内に敵も味方も包むのである。そして其機の熟するのを待つて大事を決行すると、平素不可能と考へられたことが成し遂げられる。眞に人間の力の深さは測り知られぬものがある。杭州灣上陸が南京陥落の動機を作つたものであると云はれるのはこれである。

これは戦争のみならず凡ての人事に於てさうである。感情や意志を有つて居る活きた人間相互の交渉に於て、かやうな事態の存在することは何等不思議のないことであるが、自分の強調したいのは、無生物又はこれに類するものを相手とする科學の研究に於ても、これに類似の事柄があるといふことである。

これは個人的の問題と國家或は社會的の問題とに分けて考へることが出来る。先づ個人的の場合を探つて考へて見よう。大きな科學者の業績を調べて見ると、ある研究問題に着想を得たのを契機として、急に研究の花花しい展開を示し、續けざまに重要な結果を發表する。そしてそれが一段落を告げると暫くは火山の終熄したやうに静かになり、時を得て又爆發的に大研究を完成するといふやうに波の起伏を示す人がある。但し人によつてはその山が只一つしか無いことがある。又一生平坦な路を歩む人も無いではないが、孰れにしても大きな仕事をするにはその潮時があるやうである。此潮時を摑むのを忘れぬやうにすることは研究者にとつて極めて大切であると思ふ。

それでは此潮時といふのは何であるか。これは個人的の問題であつて一般的の記述は困難であるかも知れないが、自分の考へでは一人の科學者がある研究の端緒を得てこれに深甚の興味を覚え、渾身的にこれに没頭するのが始まりではないかと思ふ。これによつて研究は遽に進み、自己を一つの雰圍氣に浸し、自己を研究の對象に溶け込ませる。云はば好い意味での自己陶醉である。ここ迄自己を持ち込まないで中絶しては折角の潮時を取り逃がして了ふことになる。かやうに考へると、無生物を相手とする問題に於ても、機を見てこれを

## 運

捉へるといふ事態が存在して不思議でない。つまり此時の問題の相手は無意識的に自分自身といふ人間なのである。

次に一國家又は一社會に於ける科學興廢の跡を尋ねて見ると、やはり盛衰の波の“うねり”がある。ある國に於ては時代により科學全般に亘つてか又は特に一つの分野についてか、花の咲き亂れるやうに美しい發展を示すことがある。大戰前の獨逸又は今日の米國は其の一例である。殊に米國に於ける宇宙線、原子核の研究について其感が深い。

かやうな状態を實現するにはそれだけの環境を必要とする。これは一方科學者の努力と他方政府乃至民間當路者の關心とによつて作られるもので、決して一日にして成るものではない。そしてそこにも勃興の機運を生ぜしめてこれに乗ずるといふことが、實際問題として重要な役を勤めるものである。

科學者の側について云へば、先づ科學界に於て互に切磋して研究精神を發揚せしめる。そして何か一つ大切な業績が出ると、周囲のものは此の機運に刺戟せられて其分野の研究は益々進み、場合によつては黃金時代を現出するに至るであらう。そしてこれは又他の分野の隆興を來す因をなすものである。かやうに科學進展の機を作り、これを摑んで立ち上り、國家的又は社會的に大行進の實現を齎すのは科學者のなすべきことであつて、此場合前述の各個人の研究態度が大勢を左右するのはいふ迄もないことである。

政府民間の當路者の側について云ふと、科學者の側で醸成しようとする機運を助長するあらゆる手段を講ずる責任がある。殊に科學者の側から最初の一石が投ぜられた場合、これに乘ずる機會を見逃してはならぬ。

翻つて我國の情勢を見ると、事變前より今日に亘つて、個人的にも國家的にも純正並に應用科學進展の機運が頻りに動いて居るのが見える。殊に自分の携はる方面に於て顯著である。國運を賭しての今日の時局に於ては、純科學方面で此機運の芽生えが多少損せられるのは止むを得ないことであらう。然し出來ることならばこれを天に聳ゆる大木に育て上げたいものである。（仁科芳雄）